Arao City Public Relations
広報あらお　2011.10.1
Vol.1424
毎月1日・15日（お知らせ版）発行

ひとの☀ちから
CLOSE UP

# 創作ステージ総監督　佐藤　進さん

さとう　すすむ●1943年生まれ、熊本市在住。　趣味　釣り
荒尾総合文化センター　企画事業チーフ
（指定管理者：中央設備 ステージ・ラボ共同体）

10月10日（月・祝）に荒尾総合文化センターの主催で創作ステージ「宮崎滔天と孫文」が公演されます。その舞台の脚本と演出を手掛けるのが、佐藤進さんです。

佐藤さんは、平成21年から文化センターに勤務しています。その年から、佐藤さんの企画で市民参加型の創作ステージが始まりました。創作ステージは、荒尾の自然や文化を伝えるという意図から、ふるさと詩集（うたあつめ）と名付けられています。

佐藤さんが演劇の世界に入ったのは高校時代。初めて演じたのは菊池寛の『父帰る』という作品。「今でも少しはセリフを覚えていますよ」と笑顔で語ってくれました。高校卒業後も、演劇に没頭する毎日を過ごしました。「若いときは、演劇のことになると時間を忘れたものです」と言う佐藤さん。そんな時間を過ごした仲間とは、終生の付き合いが続いているそうです。ほかにも、イベントの企画を手掛ける多才な佐藤さんは、以前「くまもと県民文化祭」などで脚本、演出を担当したこともあるそうです。

今回の創作ステージ「宮崎滔天と孫文～荒尾の偉人をたずねて～」を演出するにあたり、佐藤さんが思う滔天とは「生き方はとても破天荒でしたが、私利私欲ではなく世界のことだけを考えていました。辛亥革命を成し遂げた、孫文の信頼を一番得ていた日本人だったと思います」と言います。そして見どころは「滔天とその時代に生きた人は、自分たちで行動を起こし世の中に立ち向かっています。今の他力本願の時代に、荒尾の偉人たちの生きざまを見てほしいですね」と熱く語ってくれました。

また、前回までと違うところは、出演者の皆さんがほとんど演劇初体験ということです。普段はお店を経営していたり、サラリーマンであったり、さまざまな人が集まってこの舞台に臨みます。狙いは、少しでも文化活動に触れてもらうことと、この創作ステージを通して、人と人とのつながりが生まれること。「多種多様な職業の人がつながることで、何か新しいことができるのではないかと思います」と佐藤さんは言います。市民参加型のステージを行うことで、荒尾に新たな風を吹き込もうと考えている佐藤さんの今回の舞台にますます期待が高まります。

1 宮崎兄弟生家での撮影

2 テレビ局がリハーサルを取材しました

3 孫文と滔天を演じる２人と演技の打ち合わせ

発行：荒尾市役所（〒864-8686　熊本県荒尾市宮内出目390番地）
編集：総務部秘書広報課 ☎0968-63-1157（直通）　FAX0968-63-1145
資源を大切に――この広報紙は再生紙を使用しています